

接頭辞 RE の機能

– ramener / rapporter と remmener / remporter の場合 –

佐々木 香理

(関西学院大学非常勤)

本研究は接頭辞 RE (re, r, ré をまとめて RE と表記する) の本質的機能を解明する研究の一環である。我々はこれまでに Franckel (1997) の指摘に基づき、認知動詞 reconnaître, relire, retrouver, remarquer について検討した。そして動詞に RE を付加する際に発話者は次のような発話操作を行うことを指摘した(状態, 局面, 状況, 位置などを括り「あり方」と呼ぶ)。

- (1) a. 発話者は認知対象を「認知主体が元は認識した(していた)もの」や「認知主体が認識するもの」としてあらかじめ構築している。
- b. 当初, 認知主体はそうした認知対象を認識していない不安定なあり方 (position non stabilisée) にある。そうしたあり方から, 発話者が構築した認知対象を認知主体が認識することにより, 安定したあり方 (position stabilisée) に移行することを表す際に RE を動詞に付加する。

本発表では, 対象移動動詞 ramener, rapporter, remmener, remporter の実例を分析し, RE の機能を検討する。そして (1) の仮説に必要な修正を加える。具体的には, (1) では発話者による評価の対象は認知行為の対象であると述べたが, 本研究では, 評価の対象は「ramener, rapporter, remmener, remporter の事行対象が移動先・移行先にあるというあり方」であることを主張する。さらに, RE の付加が難しい動詞の特性について検討する。フランス国民教育省作成の現代フランス語において使用頻度の高い語彙の表 (eduscol.education.fr/cid50486/liste-de-frequence-lexicale.html) を参照すると, ramener と rapporter は掲載されているものの, remmener と remporter は掲載されていない。実際, 今回使用したコーパスでも remmener の使用頻度は極めて低く, remporter についても ramener と rapporter 程は使用頻度が高くない。そうした事実は RE の付加が難しい動詞の特性の解明ひいては RE の本質的機能を明らかにする上で重要である。